

二、吉野川洪水大被害実況の一端

太古から大正まで数千年来洪水毎に平坦地は全部農作物の被害を受け十年に一度位ある大洪水の時は切戸、吉永、東村、三本柳の人家は浸水座することあり多大の被害を受けた。宝曆七年、天明元年、同六年、天保九

年、同十四年、嘉永二年、安政二年、万延元年、文久元年、慶応二年と頻繁な大洪水記録にあり。なかでも嘉永二年酉歳の阿房水、慶応二年寅歳の七夕水は王子神社の境内まで浸水して林町の段丘下は大海原と化し大被害を受けた伝説がある。明治二十三年寅歳、同二十五年卯歳も大洪水であった。明治三十五年九月の大洪水の様子は米倉久吉談によると、鎌保庵東方にあつた米倉金五郎、同久吉両氏の宅は浸水軒を没し家族は早く避難したが両氏は青年で父と共に屋根に上り最後まで住宅を守っていたが増水甚だしく住家は傾き流れ出す有様となり屋敷内の果樹に移り登つた時みるみる家わ流れて西の首の竹籬に掛つて止つた、今一瞬で四人共危く命を失うところであつた。此時隣家四戸も流失し皆家財全部を流失した。東川原には二十四戸あつたが半数の十戸が流失し今は転住している。小股筋でも流失家屋九戸もあり最近まで人家を建てる者は無かつたと聞き驚く外は無い。

又明治四十四年筆者が西林校に宿直した当夜俄かに大洪水となり役場、学校共に浸水し驚く間に土佐水で増水急激で遂に小使室は座上したので、机を運んで小使と共に机の上で警戒しつつ不安の一夜を明かした。学校の下駄箱、草履脱板は繋いだ縄を切つて流失して見当らず校舎の北部平野は白海で人の乗つたまま流れる家を見て吃驚した。また土佐材木が梅川内、五明谷などに漂着しているなどの惨状を経験した事がある。尚吉永松本清三郎邸に預け置いた馬場名の屋台が全部流失したこともあり、吉永、東川原、東村、切戸西部の大部分の住宅が座上することは度々でその迷惑は被害者ならでは分らぬ程その被害は甚大であつた。岩津切戸築堤後も切戸西部の住宅は今に度々浸水し二階に避難する有様で気の毒で同情に耐えない。

洪水の被害は人畜、家産、農作物に止まらず井戸、便所の混同から泥土の停滞で不潔不快その後始末には月

余を要し悪疫の流行も伴う事あり實際の被害者以外は想像も及ばぬ大悲慘事である。これを思えば築堤によつて浸水を受けない町民の幸福こそ有り難いものである。